

『保元物語』における〈敗者〉の描き方

——崇徳院を中心として——

阿 部 日 菜 子

はじめに

『保元物語』は、保元元年（一一五六）に起きた保元の乱を題材に和漢混交文で記述された軍記物語である。この作品は『平治物語』、『平家物語』、『承久記』という、ほぼ同時代に起こった乱に題材を取った軍記物語と合わせて、「四部合戦状」とも呼ばれている。

保元の乱については、「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。」と、慈円の『愚管抄』に記述がある。^{（注1）}保元の乱は貴族社会から武家社会への大きな歴史の転換期に出来た事件であり、『保元物語』はその様子を描き出した作品として、重要な意義を持つ作品であるといえる。

保元の乱は後白河天皇と崇徳上皇の皇位を巡る争いに端を発しており、『保元物語』もその次第を語る形で始まっている。時の権力者である鳥羽院の第一皇子・崇徳上皇は、母として我が子躰仁親王（後の近衛天皇）を即位させたいと願う美福門院によつて退位させられ、恨みを募らせる。崇徳上皇には息子の重仁親王がいたため、近衛天皇に万のことがあった時は重仁が次に即位できるという目論見があった。しかし、いざ近衛天皇が崩御した際に天皇となったのは、崇徳上皇の弟・後白河であった。美福門院は、崇徳上皇側の重仁ではなく、自分が政治的に利用しやすい守仁親王（後の二条天皇）を即位させたかった。そのため、守仁の父親である後白河が中継ぎとして天皇に選ばれることになった。

結局、崇徳上皇は自分が権力を握ることができなくなったため、より一層の恨みを募らせて遂に乱を起こすに至る。そこで崇徳上皇が手を組んだのは、藤原摂関家の藤原頼長だった。頼長は父親の忠実に非常に可愛がられて育てられ、学問に秀でた人物であった。しかし、自分のみならず他人にも厳しく接していたために、人々から「悪左府」と呼ばれ恐れられていた。そして、次第に兄の関白藤原忠通と対立することになる。その結果、頼長は崇徳上皇側、忠通は後白河天皇側と、藤原摂関家の中で分裂し、とうとう乱が現実のものとなった。乱の〈勝者〉は後白河と忠通だったが、実際に軍事行動を行ったのは平氏や源氏を代表とする武士である。特に平清盛は恩賞や昇進などを積み重ねながら平氏の立場を引き上げていき、次第に武士の世が誕生していくことになるのである。

このように『保元物語』では大きく分けて〈勝者〉と〈敗者〉、二つの立場の人物が存在するが、今回注目すべき人物は〈勝者〉ではなく〈敗者〉である。崇徳上皇と藤原頼長は結託して保元の乱を起し、敗北して、逃走する。乱の後、崇徳上皇は流罪となつてその地で生涯を終え、頼長は敗走している最中に流れ矢に当たり、その傷が元となつて死亡する。二人の最期はそれぞれ異なるが、興味深いのは、彼らは二人とも死後「怨霊」になった、と後の世の人々に信じられていた点である。

安元三年七月廿九日二讃岐院二崇徳院ト云名ヲバ宣下セラレケリ。カヤウノ事トモ怨霊ヲオソレタリケリ。ヤガテ成勝寺御八講、頼長左府ニ贈一位太政大臣ノヨシ宣下ナドアリケリ。サテ又コノ年京中大焼亡ニテ、ソノ火大極殿ニ飛付テヤケニケリ。コレニヨリテ改元、治承トアリケリ。(注2)

『愚管抄』はこのように述べ、且つ安元三年（治承元年）に発生した様々な事件や天災等について記述する。それらの出来事は、傍線部に示したように、崇徳上皇と頼長の怨霊によるものだと思われていたようだ。

『平家物語』がそうであるように、中世軍記物語の背景には御霊信仰があり、これらの物語には無念のうちにこの世を去っていった怨霊たちを慰撫・鎮魂する目的がある。その点、『保元物語』も例外ではない。その意味で、中世軍記

物語は基本的に〈敗者〉のための物語であると考えられる。そこで、本稿では『保元物語』が〈敗者〉の崇徳院と藤原頼長をどのように語るのか、そこにどのような意図があったのか、ということ考察していくことにする。ただし、紙幅の都合上、二人を同時に扱うことはできない。よって今回はまず崇徳院を中心に論じていくこととする。

なお、『保元物語』の諸本は数多くあるが、本稿では最も古態を留めているとされる半井本を用いることとし、以下、作品本文の引用は、栃木孝惟・日下力 他 校註『新日本古典文学大系 保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店、一九九二年七月）に拠り、その都度頁数を記す。また、特に断らない限り、引用文に付した傍線は筆者によるものである。また、本稿における人物の呼称はそれぞれ一種に限定することとし、以下、当時の呼称にかかわらず「崇徳院」、「後白河院」などと呼び方を統一する。

一、鎮魂されるべき存在としての崇徳院

『保元物語』において、崇徳院は他の登場人物とは一線を画した存在として語られる。もちろんそれは、彼が保元の乱の発端となった人物ということもあるが、それ以上に、彼が乱に敗れ、流された土地で没した後、「怨霊」になった、という事実が物語の中に大きく影を落としているからである。

『保元物語』自体に、崇徳院怨霊を鎮魂する目的があつた、とする仮定が成り立つならば、それを達成するために、怨霊化の場面以外でも崇徳院を語る場合には何らかの配慮がされているはずだと考えられる。そこで、まず最初に作品の冒頭部分から、怨霊化に至るまでの崇徳院の記述をみていこうと思う。

物語の冒頭、上巻「後白河院御即位ノ事」では、崇徳院の父・鳥羽院の治世が語られる。その中で、崇徳院についても言及されている。その最もはじめの部分が、「御歳廿一二シテ、保安四年正月廿八日、御位ヲノガレテ、第一ノ親王ニ讓奉ラセ給ヒケリ。第一ノ親王ト申スハ、配流ノ後、讃岐院是也。」（四頁）という記述である。ここでは、鳥羽院が未だ二十一歳の崇徳院に位を譲つたといった内容のことが語られているが、既にこの時点で、語り手は崇徳院が後に配流されて「讃岐院」と呼ばれた人物だということを示している。

作中、『保元物語』の語り手が崇徳院のことを「讃岐院」と呼ぶことは無く、この冒頭部分以外は一貫して「新院」という呼称で語っていく。それは、物語中で崇徳院が配流されて、讃岐で暮らしている時の描写においても同様である。この点は、崇徳院怨霊が話題となりはじめた安元三年（改元して治承元年）に、それまで「讃岐院」と呼ばれていたのを「崇徳院」とする追号があったことにも関係しているように思われる。つまり、『保元物語』の語り手は、作中の時間よりも過去の視点から物語を語っており、「新院」という呼称からも、崇徳院怨霊鎮魂の意識は十分にうかがうことができる。

この章段では、保元の乱に至る大きなきっかけとなった後白河院即位の経緯が大まかに語られている。そして、その中で崇徳院にとって大きな問題となった出来事は、①半ば無理矢理退位させられ、近衛院が即位したこと（息子の重仁親王が即位できなかったこと）、②近衛院の死後に即位したのが次期天皇として有力視されていた重仁親王ではなく、弟の後白河院だったこと、の二点である。それぞれの問題に対して、語り手は以下のように語っている。

①「先帝コトナル御ツ、ガモ渡ラセ給ハヌニ、ヲシヲロシ奉ラセ給フコソ浅増ケレ。」（五頁）

「誠ニ心ナラズ御位ヲサラセ給シカバ、ナヲ返シツクベキ御志モヤマシクケン、又、新院ノ一宮重仁親王ヲ位ニ付奉ラセ給ハントヲボシメシケルニヤ、御心中難知。」（同右）

②「新院トハ一ツ御腹ニテワタラセ給シカドモ、女院モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ申サセ給ケルトゾウケ給ル。是ニヨリ、新院御恨今一入ゾマサラセ給ゾ理ナル。」（六頁）

右の傍線部をみてわかるように、『保元物語』の語り手は、一連の出来事に対して崇徳院側の立場（視点）から評価を下している。特に、②については、崇徳院が恨みをより一層募らせたことも「理」であるというように、その心情を認めている。結果的にみれば、この二つの出来事に対して崇徳院が恨みを持ったことが、保元の乱に直接繋がることになるのだが、崇徳院が恨みを持ったことを語り手が「理」と認めるということは、崇徳院が乱を起こしたこともやむを

えない、と語り手が認めているような印象を読者に与える。つまり、『保元物語』の語り手は、物語の開始の時点から崇徳院に対してかなり同情的な視線を向けていると考えられる。

『保元物語』において、実際の合戦が行われている場面では、上皇という立場にある崇徳院の描写はなされない。院について記述されていくのは、乱に敗れたために如意山に敗走するところからである。

敗走の場面は、主に中巻「新院、如意山ニ逃ケ給フ事」において語られている。その場面での崇徳院の様子は、「御有様、実二目モ当テラレズ」(七三頁)といったもので、その後には気を失ってしまったという点から見ても、この時の崇徳院はかなり憔悴していることがうかがえる。

その後、崇徳院を供奉していた源為義がより遠くへ逃げることを提案するが、崇徳院は、「我モサコソ思ヘ共、何ニモ御身ノハタラカヌゾ。我ヲバ只是ニ捨進テ、ヲノレラハ何ノ方ヘモ落行テ、扶リ候ヘ」(七四頁)と、供としてきた武士たちに、自分を置いて逃げるように言う。彼らがそれでも逃げようとしないので、崇徳院は、「兵ヲソイ来バ、オノレ等ガ禦キ戦ハン程ニ、我モ被レ打ナンズ。我一人ハ、物武近付バ、『我ニテ有ヲ。扶進ヨ』ト、手ヲ合テ命ヲ乞ニ、サリ共、命計ハナドカ扶ザルベキト思ヘバ、ヲノレラ御身ニ副ジト思食ゾ。此上ヲ猶モシヒテ止バ、我為アシカルベシ」(同)と再三言い聞かせて、武士たちを逃がす。

その後、山道を行く間に崇徳院の従者はわずか三、四人となってしまう。「上皇」の立場である崇徳院が、敗戦したことによってわずかな従者と共に昼夜歩き続け、出家を願っても、僧も剃刀も無く出家できない、という状況に陥っている。その中で、崇徳院は乱を起こしたことに對する後悔や、このような境遇となってしまったことへの恨みなどを口にするには無い。従者を逃がし、出家を願ったのみである。物語前半部では恨みを募らせて乱を起こし、後半部では怨霊になってしまふ崇徳院だが、この敗戦直後はそのような激しい様子や気持ちの乱れはみられない。「サコソハ心弱カリケン」(七四頁)と語られているように、この場面での崇徳院に関する表現は、他の部分に比べて悲哀を感じさせられるものとなっている。

崇徳院が他者を気にかけている描写は、中巻「新院御出家ノ事」でも同様にみられる。この章段は、崇徳院一行が山

を抜け、阿波局などの女房の屋敷に寄ろうとするものうまくいかず、やっと辿り着いた知足院という園城寺の別院で休息をとり、遂に出家する場面を描いたものである。崇徳院が出家した後、平光弘が本鳥(鬻)を切る。その息子の家弘も後に続こうとしたところ、崇徳院が「オノレモ出家シテハ、悪シカランズル。ナ切候ソ」(七八頁)と制止する。自分に合わせて共に出家する必要は無いという配慮である。崇徳院が家弘の何を懸念して「悪シカランズル」と言ったのかは定かではないが、どうなるかわからない自分の将来に、家弘を付き合わせたくはないと思って発した言葉なのではないだろうか。その後、家弘は仁和寺まで同行し、そこで崇徳院と別れて北山に籠っている。このことから、崇徳院のこの発言は、中巻「新院、如意山ニ逃ゲ給フ事」と同様に、自分といることで命を落とすことのないように、といった気遣いのようにも捉えることができる。

この一連の崇徳院の発言を受けて、逃げるように言われた武士たちや、出家を止められた家弘は、それぞれが崇徳院に対して何らかの忠義の形をみせている。まず、中巻「新院、如意山ニ逃ゲ給フ事」において崇徳院の言葉を聞いた武士たちは、「罷留モ中ノ恐アリケレバ、為義以下ノ兵共、鎧ノ袖ヲゾヌラシツ、」(七四頁)という様子をみせながら逃げていく。この部分には、自分を置いて逃げるように、といった内容の崇徳院の言葉を聞き、武士たちは涙を流す描写がある。別れの悲しみや、最後まで同行して守護することができない悔しさという意味もあると思われるが、上皇の立場にある崇徳院から、そのような言葉を賜ったことに対する感動の意味での涙も含まれているかもしれない。いずれにせよ、崇徳院が従者として連れていた武士たちに慕われていたであろうことは確かである。

次に、出家を止められた家弘だが、彼は崇徳院と別れて北山に籠った後に、山中で出会った修行者の元で出家している。主君の崇徳院に止められて一度は踏みとどまったものの、それでも思いを断ち切ることができずに出家した家弘の姿をみても、崇徳院と従者の関係が強固なものであったことがうかがえる。

このように、敗戦後の崇徳院は、乱に敗れたことで憔悴しきっている様子が描かれたり、従者に対して気遣いのようなものをみせたりするなど、後に怨霊化するような人物とは到底思えない記述がなされている。逆に言えば、崇徳院がこのような人物として描かれているからこそ、後の怨霊化の場面が際立つものとなっている、という解釈もできるので

はないだろうか。崇徳院はこの時点において、人々に恐れられるような怨霊となる人物の片鱗を覗かせていない。強い恨みなどを口にするとはなく、ただ悲しみに耐え、他者を気にかけている。そのような崇徳院が後に怨霊化するからこそ、その場面がより強烈な印象をもたらすものとなるのである。

物語冒頭の記述でみたように、『保元物語』の語り手は、全体を通して崇徳院に対し同情的な視線を向けている。そのような語り手によって、崇徳院は最終的に怨霊化するほどの怨みを抱かざるをえなかった人物として描かれていくことになるのだが、崇徳院存命当時と物語成立当時では人々の崇徳院に対する印象は大きく異なっていたと考えられる。崇徳院の怨霊が人々の間で語られるようになったのは、実際には治承元年（安元三年）頃だった。つまり、崇徳院怨霊が人々によって語られるようになるまでは、崇徳院はそのような処遇や処罰を受けていても不思議はない人物として捉えられていた、とも考えられるのである。

しかし、世が乱れ始めたことよって状況は変わり、鹿ヶ谷事件等、様々な出来事が崇徳院怨霊のせいだと語られ始める。人々がそのように思った理由は、不安定な世の中になるにつれて自分たちの生活や今後への不安が募っていき、次々に起こる事象に対して人々が納得できるものが「崇徳院怨霊」という、現実を超越した存在だったためと推測される。人々はこれまでのように崇徳院を流罪になつてもやむをえない人物として捉えることはできなくなっていた。当時の不安定な社会状況は、遡ってみれば保元の乱に起因する、という意識が人々の中にあつた、ということであろう。それと同時に、崇徳院を流罪にしまったというような思いが人々の中に生まれてきたのではないだろうか。当時の人々は崇徳院に対して、畏れの感情を抱くと同時に、怨霊化するに値する理由を持つ人物として崇徳院像を形成していったと考えられる。そして、『保元物語』は当時のそうした事情を十分に汲みとっていた。

『保元物語』は崇徳院に寄り添い、怨霊化に至るまでの様々な出来事を描写する。特に怨霊化する以前の崇徳院を、儂げな印象を持つ人物として語るることによって、最初から怨霊化するにふさわしい恐ろしさを持った人物ではなく、やむなく「怨霊化してしまった」あるいは「怨霊にならざるをえなかった」人物として、崇徳院を記述している。いわば『保元物語』は、崇徳院の怨霊化に対する正当性ともいえるべきものを自らの語りによって生み出しているのである。

ここまでみてきたように、崇徳院を「鎮魂されるべき存在」として描くために必要なことは、崇徳院の正当性を物語の中で肯定することだった。そのようにして崇徳院像を物語の中で築き上げていき、最終的に鎮魂される結末にする。このような構想そのものが、語り手が持つ崇徳院怨霊に対する畏怖の念と鎮魂の意図を最も如実に示しているといえよう。

二、「崇徳院怨霊」の存在

崇徳院の怨霊化は、『保元物語』が作り上げた創作ではない。崇徳院が流罪先の讃岐で崩御して少し経った後の、歴史の動乱期ともいべき時期から、崇徳院は怨霊になった、という認識が当時の人々の中にあつた。

崇徳院が崩御したのは、保元の乱から八年後の長寛二年（一一六四）とされている。その頃、平清盛を筆頭とする平家一門が政権を掌握し始めた。この頃は保元・平治の乱のような大きな政変が無かつた時期である。崇徳院が崩御した長寛二年は、平安時代末期という動乱期の中では比較的落ち着いた時期であつたといえよう。そのため、この頃は崇徳院怨霊についての認識は人々にそれほど無かつたと考えられる。

しかし、崩御から十数年経つと、また都の政情は不安定な状態となる。時の権力者となつていた平家に対して不満を募らせた人々による打倒計画が露見して、彼らが一斉に処罰される。安元三年（一一七七）の鹿ヶ谷事件である。清盛と後白河院はこの一件で対立を深めるなど、事態は混乱を極めていく。当時の貴族・三条実房の日記『愚昧記』には、この年の五月の記事に「讃岐院并宇治左府事、可有沙汰云々、是近日天下悪事彼人□所為之由、有疑、仍為被鎮彼事也、無極大事也云々」^(注三)、「讃岐院并左府□事、昨日以光能被仰遣也、頼業・師尚勘文下給之、又去年為用意」^(注四)と記されている。これを見ると、その頃には既に崇徳院怨霊が人々の中に意識されるものになつていたということがわかる。この年には、崇徳院怨霊を鎮めるために社が建立され、それまでは「讃岐院」と呼んでいたのを「崇徳院」と改める追号が行われたが、崇徳院怨霊は強大な力を持つ特別な存在として後の人々に受け継がれ、近世の『雨月物語』などでも語られるような「日本最大の怨霊」として位置付けられていくことになる。

歴史的事実としては、治承元年（安元三年）頃から人々に意識されていたと考えられる崇徳院怨霊だが、『保元物語』では、保元の乱から三年後に発生した平治の乱も崇徳院怨霊の仕業ということになっている。

其後ハ御ケシモ剃ス、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、中二年有テ、平治元年十二月九日夜、丑剋ニ、右衛門督信頼ガ左馬守義朝ヲ嘩テ、院ノ御所ニ三条殿ヘ夜討ニ入テ、火ヲ懸テ、少納言入道信西ヲ亡シ、院ヲモ内ヲモ取進テ、大内ニ立テ籠テ、叙位徐目行フ。（一三三頁）

これを見ると、『保元物語』の崇徳院は、まず生霊として、都に災いをもたらす存在となつてゐることが分かる。「中二年有テ」とあるので、具体的な日付は明記されていないが、平治の乱が発生する二年前、つまり保元の乱から約一年後には崇徳院は怨霊として影響を及ぼしていたということになる。『保元物語』と史実のどちらも、崇徳院は保元元年七月二十三日に讃岐に配流（遣）されているので、その時点から約一年経つた頃に、『保元物語』の崇徳院は生霊として怨霊化したと推測できる。

その後、崇徳院は讃岐の地で崩御する。『保元物語』によれば、崇徳院の怨霊は恨みの標的である後白河院に対して災いを起こそうとするが、後白河院のいる御所には不動明王などがいるため叶わない、ということと、代わりに清盛に目的を移す。そのために、清盛は平家滅亡の道突き進むことになる、といった記述がなされている。

其後、清盛、次第ニ過分ニナリ、太政大臣ニ至リ、子息所從ニ至マデ、朝恩肩ヲ并ル人ゾ無。ヲゴレル余ニ、院ノキリ人中御門ノ新大納言成親卿父子ヲ流シ失ヒ、西光父子ガ首ヲ切り、撰録臣ヲ備前国ヘ移奉リ、終ハ院ヲ鳥羽院ヘ押籠メ進スルモ、只讃岐院ノ御崇トゾ申ケル。（一三五頁）

これによれば『保元物語』では、鹿ヶ谷事件や治承三年の政変が、崇徳院怨霊の祟りによるものだという事になつ

ている。その点は、当時の人々が認識していた事実と同じと見てよい。しかし、先ほど示したように『保元物語』の崇徳院怨霊は、生霊といった形で平治の乱にまで影響を及ぼしたとされているので、実際に崇徳院怨霊が信じられるじていた時期よりも、ずっと前に怨霊化したことになっている。

現代人の我々には、崇徳院が本当に怨霊になったかどうかということは確かめようもないことである。だが、平安時代末期の混乱の中で、立て続けに起こった災害や事件などを実際に体験した当時の人々は、それを「崇徳院怨霊の仕業」と信じた。これは紛れもない事実であり、その時代の人々にとって崇徳院怨霊は確かに存在していたのである。

しかし、ここで注意しなければならぬ点がある。『保元物語』では、保元の乱が終結してからそれほど時間の経っていない時期に崇徳院は怨霊化し、平治の乱を起こした、ということになっている。だが、実際には、この時期の人々は崇徳院怨霊をさほど信じてはいなかった、と考えられるため、平治の乱を崇徳院怨霊が起こしたという『保元物語』の記述は、当時の認識と異なっているといえる。これを言い換えれば、崇徳院怨霊に対する実際の人々の認識と『保元物語』の語り手の認識には差異が認められるということである。『保元物語』は、作中で治承三年の政変に触れていることから、語り手は少なくともそれ以降の視点から物語を語っている、ということになる。つまり、現実に崇徳院怨霊の噂が語られ始めた安元三年（治承元年）を過ぎた位置に語り手は存在している。そうであるならば、この語り手は「あえて」時間をさかのぼらせ、崇徳院怨霊が平治の乱の時期から存在していた、というように語っていることになる。このことは、語り手の明確な意図によるものと考えられるが、それは一体どのようなものであったのだろうか。

三、崇徳院怨霊に対する「語り手」の畏れ

この問題を明らかにするためには、『保元物語』の語り手が、崇徳院怨霊に対してどのような立場をとっているのか、ということをもまず検討する必要がある。

先ほども述べたように、『保元物語』の語り手は少なくとも治承三年以降の時点から『保元物語』を語っている。矢代和夫氏によれば、治承から元暦にかけては、崇徳院怨霊が特に畏れられた時代であったらしい。^(註)また、野中哲照氏は、

治承元年（一一七七）と寿永二年（一一八三）頃の社会的情勢が不安定だったことを踏まえつつ、「崇徳院怨霊が畏れられたのは、治承元年と、寿永二、三年の二度であり、とくに後者は歴史上、崇徳院怨霊のもっとも畏れられた——崇徳院怨霊がもっとも猛威を振るった——時点であると考えられる。」と述べている。^(註)『保元物語』の具体的な成立年代は不明ながら、『保元物語』の諸本の中で最も古態をとどめているとされる半井本が治承三年の政変に触れているところをみると、矢代・野中両氏が指摘しているように『保元物語』の語り手は、崇徳院怨霊がもっとも畏れられていたといわれる時点から物語を語っている可能性が高い。

それでは、『保元物語』の語り手は、崇徳院怨霊に対してどのような立場をとっているのだろうか。

野中氏は『保元』には、平治の乱のことや治承三年のクーデタまでもが視野に収められて語られており、保元の乱に端を発する、院政末期の動乱を見据えて語っているというべき」との見通しを述べている。^(註)先述したように、崇徳院怨霊が平治の乱を引き起こしたと語られているところからみて、『保元物語』は保元の乱後の出来事も、乱に到る顛末や合戦中の描写と同じように、それなりの重要性をもって語ろうとする姿勢があるといつてよい。

また、崇徳院怨霊が治承三年の後白河院の院政停止を引き起こしたと物語の中で述べられていることについて、野中氏は「崇徳院怨霊が乱世の原因であるというような認識まで踏み込んで提示しようとしている」と述べている。^(註)この点では、崇徳院が怨霊化を宣言した後の記述である「平治元年十二月九日夜」（一三三頁）以降の平治の乱に関する部分にもよく表れていると考えられる。つまり『保元物語』には、保元の乱後の歴史の転換期ともいえる大きな動乱は崇徳院怨霊が原因である、というように語る意思がある。同じ章段の中でこのような例があるため、崇徳院怨霊が治承三年の政変を引き起こしたということになっている点も、語り手の明確な意志によるものだといいと考えられる。

歴史的な事実としては、平治の乱が発生したのは崇徳院がまだ存命していた頃だが、治承三年の政変が起きたのは崇徳院が崩御して十数年経過した後である。『保元物語』においてもそれは同様で、崇徳院は怨霊化を宣言した後には生霊となつて平治の乱を引き起こす。そして「八年ト申シ長寛元年八月廿六日、御歳四十五ト申シニ、讃岐国府ニテ御隠レアリヌ。」（一三四頁）と、崇徳院が崩御したことが述べられている。しかし、その後も崇徳院怨霊は鎮まることはなく、

鹿ヶ谷事件や治承三年の政変などが崇徳院怨霊によって引き起こされたということが語られていく。

野中氏は以上を踏まえて「基本的に崇徳院は鎮魂されない状態で怨霊として威勢をふるっている」と述べている。^(注10)つまり、『保元物語』においては、崇徳院怨霊が西行によって鎮魂される、という明確な記述があるまで、崇徳院は怨霊として畏れられていたことになる。作中には西行による鎮魂が具体的にいつのことなのかという記述は無いが、本文の記述からみて治承三年の政変の後であることは明白なので、先程から述べているように語り手の物語の中での視点はこの時点にあるといえるだろう。

野中氏が、「崇徳院自筆五部大乘経供養問題を探り込むなど、『保元』は寿永二〜三年(一一八三〜四)の、崇徳院怨霊がもつとも畏れられた時代の社会状況を映し出している」と述べているように、^(注11)語り手の物語の中での視点と、語り手が作品に取り上げた時代には数年の差異がみられる。しかし、今回の場合は、当時の人々が抱いていたと思われる、崇徳院怨霊に対する畏れを治承三年の直後に設定して語ることが重要であると考えられる。

また、崇徳院怨霊が最も畏れられていた時に、西行によってそれが鎮魂されたと物語るところには、語り手の崇徳院怨霊に対する畏怖が強く表されているとも考えられる。よって、西行による一連の鎮魂譚は、崇徳院怨霊を考える際にはかなり重要な意味を持つのではないだろうか。

『保元物語』の本文において触れられている歴史的な出来事は、下巻「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事^付崩御ノ事」における鹿ヶ谷事件と治承三年の政変である。この二つの事件ももちろん重要ではあるが、現実的に考えればこれらとほぼ同時期に発生している出来事は多々あったはずで、この点について野中氏は、「例の文脈が、崇徳院怨霊によって脅かされた社会を強調して語るために、負の要素ばかりを語って、正の要素を捨象したものと考えられる」と述べている。^(注12)「例の文脈」とは、「通時的最終記事として確認したのは、鹿の谷事件(一一七七)と治承三年のクーデタ(一一七九)であったが、この周辺で語り手の語らなかつたことがあまりにも多すぎはしまいか。」^(注13)という野中氏の問題提起によるものを指す。つまり、『保元物語』の語り手は、自らが抱いている崇徳院怨霊に対する畏怖(当時の人々が抱いていた畏怖)を表現するために、必要な出来事のみを記述し、他は語らない選択をとったのだということである。

野中氏はこれを語り手の視点（野中氏はこれを〈現在〉とする）と絡めて、「語り手の〈現在〉とは、物語という表現世界における、怨霊によって脅かされている世相の表現としての〈現在〉、語り手が畏怖を装うための〈現在〉である」といふことができる」と論じている。^{（注14）}

野中氏が述べた「例の文脈」のように『保元物語』が事実を知っていながらそれを無視する、つまり、語るうと思えば語ることできる内容をあえて「語らない」という選択をした背景には、語り手の作品に対する意図ともいふべきものが秘められているように思われる。それは「崇徳院怨霊に対する畏怖」である。それを作品に反映しようとするため、それに意味づけられることを語り、不必要な、あるいは不都合のあることを語らない、という選択をしているのだと考えられる。

四、崇徳院怨霊化の場面

ここまで述べてきたように、『保元物語』において崇徳院が怨霊化したとされているのは、崇徳院が保元の乱に敗れて流罪となった約一年後である。「敗戦」や「流罪」からはそれなりに時間が経過しており、もし崇徳院がこれらの事実に対して怨霊化するほどの怨みを抱いていたのなら、一年待たずとも、それらが起こった時点で怨霊化していてもいはずである。

『保元物語』において崇徳院が怨霊化を宣言するのは、下巻「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付崩御ノ事」である。そのはじめの部分において、崇徳院の流罪先での暮らしぶりが描写されている。

院ハ讃岐ニ付セ給テ、習又鄙ノ御住、只推量リ奉ルベシ。公家、私、事問人モナカリケリ。僅ニ候祇候ノ女房共モ、臥沈泣ヨリ外ノ事ゾナキ。秋モ深ク成行バ、イトゞ物ゾ悲キ。松ヲ払風ノ音モハゲ敷テ、叢毎ニ鳴虫ノ音モ弱リ、折ニ触レ、時ニ随テハ、只ウカリシ都ノミ忍ル、涙ニ、ヲサウル袖ハ朽チヌベシ。

（一三二頁）

この場面は、都から遠く離れた讃岐という場所で、罪人として余生を過ごすことを余儀なくされた崇徳院の哀れさ、みじめさ、悲しさを、情景描写から如実に感じ取ることのできる部分である。

この時点では、まだ崇徳院は怨霊となることを決意してはいない。先ほどの引用部分の後に、崇徳院の独白が置かれているが、「何ナル罪ノ報ニテ、遠キ島ニ被_レ放テ、カ、ル住ヲスラム。馬ニ角生、烏ノ頭ノ白クナラム事モ難ケレバ、帰ルベキ其年月ヲ不_レ知。外土ノ悲ニ堪ズ、望郷ノ鬼トコソ成ンズラムメ。」(二三二頁)と、都に帰りたいたいという強い心を覗かせているのみで、後白河院等に対する強い怨みを述べることはない。それよりも、「後生菩提ノ為ニ、五部大乘経ヲ墨ニテ如_レ形書集テ候ガ、貝鐘ノ音モセヌ遠国ニ捨置カン事ノ不便ニ候。」(二三三頁)と、五部大乘経を写したことを明かす。そして、崇徳院はそれを都に届けて欲しいと願う。

しかし、その願いが叶うことはなかった。崇徳院はそれを知ると、遂に思いを爆発させて、怨霊化を宣言する。

此由ヲ新院被_二聞食_一ニテ、「口惜事ゴサンナレ。我朝ニモ不_レ限、天竺_二震旦_一ニモ、新羅百濟ニモ、位ヲ争ヒ、国ヲ論ジテ、伯父甥合戦ヲ成シ、兄弟軍ヲス。果報ノ勝劣ニ随テ、伯父モ負ケ、兄モ負。其事悔還テ、手ヲ合セ、膝ヲカ_二メテ嘆時ハ、免ス事ゾカシ。今者後生菩提ノ為ニ書タル御経ノ置所ヲダニモ免サレザランニハ、後生迄ノ敵ゴサンナレ。我願ハ五部大乘経ノ大善根ヲ三悪道ニ抛テ、日本国ノ大悪魔ト成ラム」ト誓ハセ給テ、御舌ノ崎_二ヲ食切_一セ座テ、其血ヲ以テ、御経ノ奥ニ此御誓状ヲゾアソバシタル。(二三三頁)。

この場面は、「後生菩提の為に」書いた五部大乘経の善根を悪道に投げ捨てても怨霊となつて、この怨み、怒りを晴らすというような、崇徳院の強い意思を表明したものとなっている。この章段の冒頭部分の悲しみが強調された箇所とは、まったく対照的である。だが、その「悲しみ」の表現が前に置かれているからこそ、この怨霊化の場面が際立つものとなっている。いずれにせよ、崇徳院が感じた「悲しみ」、「怒り」、「怨み」が全て集約されて、この怨霊化に至っ

たと解釈できよう。

ちなみに、『保元物語』において、崇徳院が怨靈化するきつかけとなったものは、五部大乘経である。五部大乘経とは、「天台四教儀にいう究竟の大乘仏教の教えを説いた五部の経典。華嚴経、大集経、大品般若経、法華経、涅槃経」^(注15)を指す。このように五部にわたる経典を、崇徳院は写経した。それだけでも崇徳院の並々ならぬ執念が伺えるが、諸本によって、これがどのように書かれたものなのかという点において異同がみられる。

金刀比羅本では、「後生菩提の爲にとて、御指のさきより血をあやし、三年が間に五部大乘経を御自筆にあそばされたりけるを」とあり、^(注16)ここで五部大乘経は、崇徳院が自らの血を以て写経したものだということになっている。しかし、半井本と古活字本にそういった記述は無い。^(注17)

血で書かれたものとそうでないものとは、読み手の印象も随分と変わってくる。血で書いた記述がある金刀比羅本では、怨靈化する以前から崇徳院にそういった片鱗があるように思わせる表現となっている。一方で、墨で書かれたと思われる半井本と古活字本は、五部大乘経を写経していた時点では怨靈になるほどの怨みは抱いていない（自覚していない）ように感じる。

実際に、崇徳院が五部大乘経を血で書いたという事実はあるのだろうか。平安時代末期の貴族、吉田経房の日記『吉記』^(注18)寿永二年七月十六日条に以下のような記述がある。

〈崇徳院自筆五部大乘経可有^レ供養之由沙汰事〉崇徳院於^レ讚岐、御自筆以^レ血令^レ書五部大乘経一給、〈件経奥令^レ書、可^レ被^レ滅亡天下之由令^レ書給事〉件経奥、非理世後世料、可^レ滅亡天下之趣、被^レ注置、件経伝在二元性法印許、依^レ被^レ申此旨、於^レ成勝寺可^レ被^レ供養之由、以^レ右大弁被^レ仰左小弁光長、為^レ令得道彼怨靈一歟、但尤可^レ被^レ予議一歟、未^レ供養之以前猶果其願、況^レ於開題之後哉、能^レ々可^レ有^レ沙汰一事也、可^レ恐々々、

右の引用部によれば、実際に崇徳院が血で五部大乘経を写経したという認識は当時の人々にもあったようだ。しかし、

これが寿永二年七月の記述だということに注目したい。第三節で述べたように、この頃は崇徳院怨霊が最も畏れられていた時期である。「崇徳院が五部大乘経を写経した」という事実には、様々な脚色を加えられて、このような形で伝えられることになった可能性もあるのではないかと思われる。「吉記」の著者・吉田経房は、血で書かれた五部大乘経が成勝寺で供養されるらしいというのを聞いただけで、その実物を見たわけではない。そのため、本当に血で書かれた経文が存在していたのかということは疑わしい。この点については、山田雄司氏も、「崇徳院が亡くなった長寛二年から十九年たつてからはじめて経の存在が語られるのにも疑問を感じざるをえない。」^(注19)というように指摘している。

しかし、大事なことは、当時の人々が崇徳院怨霊をこのように捉えていた、ということではないだろうか。自らの血で、三年もの間ただひたすらに写経をしている姿が目には浮かぶほど、当時の人々は崇徳院怨霊を畏れていた。五部大乘経を血で書いた記述が無い半井本と古活字本も、崇徳院が怨霊となる時に書いた誓状が、舌を噛み切った際に流れた血によるものだというように記述している（金刀比羅本も同様）。事実かそうでないかには関わらず、崇徳院には「怨霊」としてのイメージが定着していたのだと考えられる。

五、西行による鎮魂

様々な災害や政変を引き起こすなど、恐ろしいイメージを人々に持たれる怨霊として捉えられていた崇徳院だが、『保元物語』では彼に対して最終的に「鎮魂」という救済が与えられる。特に重要視されているのが、西行による鎮魂譚である。

『保元物語』において、その鎮魂の場面は以下のように語られている。

西行法師、讃岐へ渡リタリケルニ、国府ノ御前ニ参テ、カクゾ讀タリケル、
 松山ノ浪ニユラレテコシ船ノヤガテ空ク成ニケル哉
 白峰ノ御墓ニ参テ、ツクくト候、泣クカウゾ仕リケル。

ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラン後ハ何ニカハセン

怨霊モ静リ給フラムトゾ聞シ。(一三五頁)

『保元物語』では、西行が讃岐を訪れて歌を詠み、そうすることによって崇徳院怨霊は鎮められ、崇徳院関連章段も終息する。

ここで注意したいのは、『保元物語』の西行は、崇徳院怨霊鎮魂の目的で讃岐を訪れているという点だ。西行による鎮魂の前に記述されているのは、崇徳院が清盛を崇りの対象にした結果、治承三年の政変が起きたということである。つまり、時系列に沿って物語を考えれば、その政変が発生した以後に、西行は崇徳院怨霊を鎮魂するために讃岐へ渡ったとするのが自然である。このことについて、原水民樹氏は以下のように述べている。(注)

この見方が妥当なものであるならば、この解釈が作者の意図にかなうものであるならば、半井本の記述には明らかに一つの虚構があることになる。

というのは、半井本は、清盛をして後白河院政を窮地に追いこませた崇徳院の荒れ狂う怨霊を鎮める目的をもって西行が讃岐へ下向したような書きぶりであるが、実際には、西行が讃岐に赴いたのは、清盛の悪行として記されている鹿谷事件（成親殺害、成経遠流、西光斬首）や、関白基房の備前国配流を始め、太政大臣師長以下四十三人の解官、並びに後白河院幽閉事件が起こる以前のことなのである。つまり、半井本は、世情の混乱を記した後、実際に、これら諸事件より以前の出来事である西行の崇徳院陵参詣によって、その混乱を惹起した崇徳院怨霊の鎮魂を期するという構想をとっていることになる。

原水氏の指摘にもあるように、西行が讃岐を訪れたのは、崇徳院怨霊が原因となって発生したとされている事件等より前のことであり、『保元物語』（半井本）とは順序が逆である。つまり、実際の西行が讃岐へ渡った理由は崇徳院怨霊

の鎮魂ではない可能性が高い。にも関わらず、『保元物語』における西行は崇徳院怨霊を鎮魂する目的で讃岐に向かっている。そして、西行に関する一連の説話を語るために物語中で語る内容も前後させている。

もっとも、『保元物語』のこの部分は具体的な日付が一切明記されていない。また、鹿ヶ谷事件や治承三年の政変などが起きたことを受けて、西行が讃岐へ渡ったというような記述もなされていない。「其後、讃岐院、方々へゾ御幸成ヌト見進セテハ、絶入シ、爰ニ御幸成ヌト見進テハ、ケ殺セ進ケリ。」(一三五頁)という結びの言葉の後に「西行法師、讃岐へ渡リタリケルニ」(同)と続いている。そのため、どこか唐突な印象があることも否めない。崇徳院が配流された際の日時など、歴史的事項や物語に関係する部分は、それがいつ起こったのかを具体的に記述する傾向がある『保元物語』にしては、この点はかなり不自然である。このことについて、原水氏は「全般的にみて、史実に忠実で編年体的性格が濃いといわれる半井本が、このあたりに限って年次を明記していないのには、それなりの理由があったわけである。」と述べている。^(注2)確かに、これまで貫いてきた記述の方針・スタイル・性格を曲げてまで、西行による鎮魂譚をその箇所に置いたということには、語りの明確な意図があるように思われる。

ここから読み取ることができるのは、『保元物語』にとつて、西行による崇徳院の鎮魂譚は必ず記述しなければならぬものであったということである。つまり、「西行による鎮魂を描くこと」が『保元物語』にとつて重要な意味を持つ。そして、その鎮魂は物語の世界のみで果たされるべきものではなく、崇徳院怨霊が信じられていた当時の社会においても望まれていたことなのではないだろうか。

おわりに

『保元物語』で崇徳院怨霊を鎮魂するためには、崇徳院が怨霊となることへの布石を物語の中で語る必要がある。また、怨霊を鎮める目的があるならば、その対象の崇徳院(怨霊)に対して、怨霊化の理由の正当性を認めなければならぬ。事実、第一節で述べたように『保元物語』は随所に崇徳院に対して同情的な面がみられる。そのために、『保元物語』の崇徳院は、怨霊化して然るべき人物であるというように読者に印象づけられていく。そして、崇徳院怨霊を鎮

魂するには、怨霊化に至る過程やその顛末、あるいはその後の社会にそれがどのような影響を及ぼしたのか、ということを描き、このことが物語の語りにも反映されていくことになる。よって、「崇徳院怨霊の鎮魂」という語りの目的を達成するために、本来行われていないはずの崇徳院怨霊の鎮魂を理由に西行が讃岐を訪れる話が、一連の結びの部分に置かれているのだと考えられる。つまり、『保元物語』にとつて、崇徳院の怨霊化に至るまでの描き方は、「鎮魂」という目的を達成するための「過程」の一つだとも考えられる。しかしながら、『保元物語』において〈敗者〉がどのように描かれているのか、という点は、崇徳院に関する記述のみで結論づけることはできない。よって、崇徳院と同じように乱の首謀者として語られている藤原頼長はもちろん、実際に軍事行動を行った武士の〈敗者〉について論じていくことが今後の課題である。

本稿の冒頭で引用したように、『愚管抄』には「日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。」という記述がある。保元の乱は当時の日本が「武者の世」となっていくにあたって重要な戦乱だった。そうであるにもかかわらず、『保元物語』はその戦自体を大きく扱うことはせず、むしろ戦を構成する「個人」に目を向け、物語全体を通してその注目した人物に焦点を当てているような印象を受ける。今回の崇徳院の例でいえば、『保元物語』は保元の乱の顛末の中で起こった様々な出来事の一つとして「崇徳院怨霊の鎮魂」を描いているのではない。むしろ、「崇徳院怨霊の鎮魂」を語るという目的のために保元の乱を扱い、時に虚構などを織り交ぜながら物語を語っていると考えられる。『保元物語』がそのような作品だとするならば、この物語は崇徳院に代表される〈敗者〉に対してとりわけ強い関心を抱いている、といえるだろう。

軍記物語における〈敗者〉とは、単純にいえば「戦に負けた人物」である。しかし、軍記物語は彼らをただ単に戦に負けただけの人物としては捉えていない。『保元物語』がそうであるように、〈敗者〉を語ることによって、作品自体の意思や目的を描き出そうとしている。このことが、軍記物語が〈敗者〉のための物語ということを示す根拠であり、軍記物語が持つ〈敗者〉へのまなざしといえるべきものだと考えられるのである。

注

- 1 『愚管抄』 巻第四。岡見正雄・赤松俊秀校注『日本古典文学大系 86 愚管抄』（岩波書店、一九六七年一月）より引用（二〇六頁）。以後の『愚管抄』本文の引用は本書による。引用の際、旧字体は新字体に改めた。
- 2 『愚管抄』 巻第五（二四六頁）。
- 3 『愚昧記』 治承元年（安元三年）五月九日条。東京大学史料編纂所編『大日本古記録 愚昧記 中』（岩波書店、二〇一三年三月）。以下、『愚昧記』の引用は本書による。
- 4 『愚昧記』 治承元年（安元三年）五月十三日条。
- 5 下巻「新院讃州二御遷幸ノ事」の記述による。
- 6 矢代和夫「崇徳院・悪左府の怨霊―記録からみた復讐者の時代―」（『都大論究』五号、東京都立大学国語国文学会、一九六一年十二月）。
- 7 野中哲照『「保元物語」における語り手の〈現在〉と崇徳院怨霊』（『国文学研究』一〇一号、早稲田大学国文学会、一九九〇年六月）の注12。
- 8 注7論文に同じ（二六頁）。
- 9 注7論文に同じ（二七頁）。
- 10 注7論文に同じ（二七頁）。
- 11 注7論文に同じ（二七頁）。
- 12 注7論文に同じ（三一頁）。
- 13 注7論文に同じ（三一頁）。
- 14 注7論文に同じ（三一頁）。
- 15 本文脚注五・解説（二三二頁）。
- 16 永積安明・島田勇夫校註『日本古典文学大系 保元物語・平治物語』（岩波書店、一九六一年七月）（二七九頁）。

- 17 半井本では、「御自筆ニ五部大乘経ヲ三年ニアソバシテ」とあるのみで、五部大乘経の文字がどのように書かれたものなのかという記述が無い。古活字本も同様で、「五部の大乘経を三年がほどに御自筆にあそばして」という記述に留まっている（古活字本の引用は注16に同じ）。
- 18 『吉記』寿永二年七月十六日条。引用は、栃木孝惟・日下力他校註『新日本古典文学大系 保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店、一九九二年七月）所収参考資料による。
- 19 山田雄司『崇徳院怨霊の研究』（思文閣出版、二〇〇一年二月）、第二章『保元物語』の虚構―崇徳院の実像をめぐって―より引用（九〇頁）。
- 20 原水民樹『崇徳院の怨霊と西行―保元物語の成立をめぐる一問題―』（『国語と国文学』五二巻二号、至文堂、一九七五年二月）（三〇頁・上段）。
- 21 注20に同じ（三〇頁・上段）。

（付記）

なお、下巻「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付崩御ノ事」の「生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ、中二年有テ」（テキスト一三三頁）の前後については、白崎氏によって続き具合の不自然さが指摘されている（白崎祥一『保元物語』の一考察―讃岐院記事をめぐって―『古典遺産』二七巻、一九七七年七月）。そのため、崇徳院が怨霊として影響を及ぼしはじめたのがいつなのか、ということについては判断を保留せざるをえない。しかし、いずれにしても『保元物語』としては、「平治の乱は崇徳院の仕業である」という立場に立っていることは疑う余地がないと考えられる。